

国際児童図書評議会について

竹内 佑利子

子どもと子どもの本に関心をもち、作品の質の向上と読書の普及に地味な努力を重ねる国際的な組織をご紹介したい。その会は英語名を International Board on Books for Young People、略して IBBY という。第二次大戦後、子どもたちに希望とよい本をあたえたいと願うドイツ生まれの女性が、エーリッヒ・ケストナー氏らとともにはじめた。現在世界の五〇か国以上が参加し、個人の参加も認められている。例えばスリランカは、個人会員が三名になった時点で、ナシヨナル・セクションを設立しようとしている。会員数が最も多いのはスイスで、六千人。子どもや本の身近にいる人々のほか、男女を問わず一般市民が多数入会している。ボランティアによる寄付も多い。スイスの国民皆兵は平和維持の一つの姿勢としてよく引合いにだされるが、世界でも珍しい多民族（言語）児童図書館をもつなど、きめ細かい配慮をする国である。日本の JBBY の会員数は現在六〇〇人、作家、画家、書

店、図書館活動にたずさわる人々である。それからより多くの市民の参加を願う私達を勇気づけてくれるのが、日本各地の女性会員である。余談になるが、多くの有能な女性達は（勤めをやめて結婚したあと）才能と教養を金庫にしまいこむのだろうかと思は不思議に思っていた。最近講演のために訪れる先で、子どもの読書普及に活躍している女性達に会い、謎が解けた気がする。本を読む子（わが子とは限らない）を育てる彼女達の、よい本を作ろうとしている側に向ける厳しい目が、我々を励まし支えてくれるのだとわかったからである。日本中にしてきな女性達が星のように光っているのはたしかであるが、その輝きを支持しているのが日本の男性であるのもまたたしかだろう。

話を IBBY に戻そう。政治に左右されないことが原則であり、ソ連、中国をはじめ多くの社会主義国もメンバーである。絵本の領域では東欧が先進国であり、世界中の絵本を集

めた「世界絵本原画展」と絵本賞「金のりんご賞」の授賞式は、チェコのブラティスラバで隔年に開催される。現会長がチェコ人であり、事務局長がスイス人であるのは、むろん選挙で決まったことだが、出身国の子どもと子どもの本に寄せ関心の高さと無縁ではない。国際理事は、米、メキシコ、ノルウェー、独、イラン、加、オーストリア、日本である。私は国際理事は出身国の利益代表にあらず、というコンセプトが気に入って理事職をお引受けした。

IBBYの使命は三点にある。第一に子どもの本の質を高めること。具体的には、二年ごとに開催される世界大会において、国際アンデルセン賞作家賞と画家賞を授与する。日本では安野光雅氏が画家賞を受賞している。一九八六年にミヒャエル・エンデ氏やフィリッパ・ピアス氏を迎えて東京で第二〇回大会がひらかれたときは、豪州が作家賞（パトリシア・ライトソン氏）と画家賞（ロバート・イングペン氏）を同時受賞した。一九九〇年のコロニアル・ウィリアムズバーグ市（米）における第二二回大会に向けて、『かいじゅうたちのいるところ』で名高いモリス・センダック氏が魅力的なポスターを作って大勢の参加をと呼びかけている。

一九九〇年は国際識字年でもある。読み書きをあたりまえのように思う私達だが、イリタラシーの七五パーセントはアジア人である。というわけで私のおもな関心は、IBBYの第二の使命Ⅱ読書の普及および、第三の使命Ⅲ障害児の読書のほうにある。読書の普及には日本が大きな貢献をしている。ユネスコ・アジア文化センター（東京）は、毎年アジア各国

の人々を招いて、子どもの本の編集、印刷、読書の普及などのノウハウを伝える。IBBYにかかわりのあるところでは、朝日新聞社がスポンサーで、IBBYが選考をする「IBBY朝日読書普及賞」がある。朝日が毎年選考費用一〇〇万円、副賞一〇〇万円をだして、児童の読書の普及にたずさわってきた団体、プログラムを奨励する。第一回はベネズエラのバンコ・デル・リブロ（本の銀行）、第二回はタイのポーターブル・ライブラリーが受賞した。来年四月ポローニアのブック・フェア会場では、ジンバブエのハラレ市の、昔語りから子ども達を本の世界にいざなうのに成功したグループに賞が贈られる。

障害児の本と読書に最も力を注ぐのは、北欧である。なかでもノルウェーは、IBBYの組織である「身障児資料センター」を開設当時から援助し、今年も多額のグラントをだしている。国際理事の仕事は、世界中で出版されている身障児のために特別に作られた本（たとえば寝たまま手をもって読める布の絵本など）のカタログを作り、次にそれらの本の巡回展をおこなうことである。世界には、このようなアイディアの恩恵に浴することのない子ども達はまだいる。読書をたのしみ想像の世界にあそぶひとときは、寝たきりの子の日々をどんなに明るくするだろう。北欧の市民の意識の高さに感嘆するだけでなく、日本でも、積極的にこれらの活動に参加しようといってきたる声がわきあがるよう、切望している。

（連絡先）IBBY 日本国際児童図書評議会・〇三―四九八―四四二四）
（たけうち・ゆりこ／経営学部専任講師）